

## 縄紋時代早期 -押型紋土器の広域編年研究-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 東三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19732">http://hdl.handle.net/10291/19732</a>

# 2016年度 文学研究科

## 博士学位請求論文（要旨）

### 縄紋時代早期押型紋土器の広域編年研究

学位請求者 史学専攻  
岡本東三

#### 内容の要旨

##### 1. 本研究の問題意識と目的

学生時代、敬愛する先史考古学者佐藤達夫から「考古学の真髄は？」という質問を受けた。この本質的な問いに、たじろぎながらも「モノの研究です」と答えるのがやっとならであったことを今でも鮮明に思い出す。佐藤の答えは、「モノ」ではなく「ヒト」だということ。「モノ」は「ヒト」によってつくられ、「ヒト」とともに動き、「ヒト」が用い、伝えられるのだという。「ヒト」とは集団であり、社会である。しかし「ヒト」の心性や行動を直接読み取ることにはできない。レヴィーストロースがカドゥヴェオ族の装飾文様を通して、その社会構造の心性に迫ったように、「モノ」の研究を通して、はじめて「ヒト」の歴史や社会を知ることができるのである。考古学が歴史学であり、人文科学である由縁である。縄紋土器の文様や彼らが残した「モノ」から縄紋人の歴史や社会を考察し、直線紋から曲線紋への変化や器形・器物の豊かさを通して、縄紋人の心性や社会の変化に迫ることができるのである。

本論を述べる前に、まず「編年研究の意義」、「押型紋土器とは何か」といった基本的問題について考えてみたい。

**広域編年をめざして** 考古学をはじめた頃、「門前の小僧、経を読む」式で『ドルメン教材社』の青図をもとに土器型式を覚えたものである。しかし、それは「小破片にいたるまで、何々式何々式と当てるクイ

ズ」でもなく、編年のための編年ではないのだ。発掘してみると土器型式は、電車や自動車の型式を覚えたようにマニュアル通りには出てこない。遺跡や遺物は多様な姿を映し出す。

私たちが考古学を始めた1960年代、藤森栄一によって「いつまで編年をやるのか」と刺激的な批判がなされた。今日、縄紋土器の編年表は時期ごと・地域ごとに一見、整備されたようにみえる。しかし各地域内の変遷（縦軸）をみても、ましてや地域間の対比関係（横軸）も十分に検証されたとは言い難く、どの時期・地域をとっても解決すべき課題が多い。

ここに取り上げる押型紋土器についても、立野式と樋沢式のどちらが古いのか、地域の異なる捺糸紋土器と押型紋土器の対比関係、西部ネガティブ押型紋と中部ポジティブ押型紋の対比関係など、その課題は何一つ解決していない。「編年学は確かに行くところまで来たわけである」との藤森の言説は、編年学を無視して文化的解釈に走った党派の誤った認識である。山内清男は学史に照らして、改めて編年学の正当性を主張し「「余り分け過ぎる」というブレーキは落伍者の車についていた」と手厳しく反論する〔山内1969〕。「型式」という名のコマは盤上に正しく配置され、慎重に操作すればするほど、ヒトの動きが自然とみえてくる。藤森のいう土器型式における「可搬性」と「定着性」の解釈論も、正しい編年的手続きを経て始めて検証できるのである。佐原 眞は「いつまで編年やるのか、と問われれば、考古学が続く限り」と答えたように、その編年網は縦横に限りなく整備していかなければならない。

「型式」とは では「型式とは何か」。佐藤流にいうならば、「モノのカタチ」は「ヒトのカタチ」、すなわちモノを作り出したヒトの意思や行動や伝統が、そのカタチに反映されているのである。土器作りの作法は、製作の流儀、施紋の流儀、胎土の流儀の三要素から成り立っている。その意味において「型式は実存するのである」。仏師がノミで精魂込めて「仏」を削り出すように、発掘者は遺跡から「型式」を丁寧に掘り起こす作業からはじめなければならない。これは以前にも述べたが、千葉県城ノ台南貝塚の発掘で「幻の型式」といわれた子母口式土器を、閉じ込められた貝層の腐敗臭とともに検出した時の実感でもある。型式は遺跡や遺物から学ぶものであって、高邁な理論から学ぶものではない。

型式は「人・時・空」を共有する一定の広がりをもった単位として認定することができる。型式の細別は、ちょうどルービック・キューブのワンピースの正方体と同じと考えればよい。最小の正方体は縦軸にも横軸にも連結し、色分けされた大きな正方体をつくる。それが大別であり、それぞれの色分けされた六面は時期を表す。また土器型式の平均存続期間は等質であって、ある型式の存続幅だけが長く、他の型式が短いというわけにはいかない。キューブは作動しないし、編年も成り立たない。だからこそ、山内が提示した編年の方針は「細別型式は十進法を用いて整理する」のである。

**広域編年** 九州島から北海道渡島半島に広域に分布する押型紋土器は、縄紋時代早期前葉に列島に広がった回転施紋の土器である。その出現期は草創期後半まで遡るが、縄紋土器の装飾史上、回転施紋から描線施紋への転換期を迎えた時期に広がっている。それは縄紋人が自由に自分の意思で文様を描き、多様な器形を生み出す華やかな縄紋土器の前段階にあたる。押型紋土器の広域編年にあたり、草創期から早期への転換期を沈線紋土器（三戸式）の出現を基準として、三戸式土器以前を草創期、以降を早期とする。

押型紋土器は回転の軌跡による簡単な装飾ではあるが、それぞれの地域性をもっている。大きくは西部ネガティブ押型紋土器、東部ポジティブ押型紋土器に二つの文化圏に分かれる。さらに西部ネガティブ押型紋の圏外にあたる九州島には貝殻円筒形土器、東部ネガティブ押型紋の文化圏には東北の日計式、中部の樋沢・細久保式の地域的な押型紋土器が、関東では回転施紋（捺糸紋土器）から描線施紋に転換した沈線紋土

器が出現し、地域的特性をもった型式として展開するのである。列島に広がる押型紋土器をみると、九州島押型紋文化圏、西部押型紋文化圏、中部押型紋文化圏、東北押型紋文化圏の四つの地域的特質がみえてくる。こうした押型紋土器の地域的特質を通して、列島各地の縄紋社会にも独自の地域社会が形成しはじめたことを確認できる。

押型紋土器の出自と終焉、各地域の在り地と搬入土器の関係、沈線紋土器との関係など、回転手法から描線手法への転換期における縄紋社会の構造的変化を解き明かさなければならないのである。それが広域編年研究の目的でもある。

## 2. 本研究の構成ならびに各章の要約

1. **押型紋土器の起源** 押型紋土器の起源は、おそらく回転施紋による縄紋土器の伝統の中から生まれたのであろう。すなわち縄の原体を彫刻棒の原体に持ち替えて回転施紋したのが押型紋土器である。押型紋土器の原体が前段階の捺糸紋土器の原体を模したのか、表裏縄紋土器の原体から派生したのかは、その起源を考える上で重要である。しかし関東の捺糸紋文化圏における押型紋土器の在り方は後半期の稲荷台式以降に伴い、あくまでも搬入的であり客体的な異系統の存在でしかない。捺糸紋土器の伝統の中から生まれたとは考え難い。

押型紋土器の起源は中部の押型紋土器に求めることができるが、ポジティブ押型紋の樋沢・細久保式と西日本のネガティブ押型紋の大鼻・大川式の新旧関係は未だ解明されたとはいえない。中部のネガティブ押型紋の立野式を介して大鼻・大川式が古く、ポジティブ押型紋の樋沢・細久保式が新しいとする一系統論が通説となっている。しかし、大鼻・大川式と樋沢・細久保式の対比を検討すると、両者は併存する二系統の押型紋土器であることが判明する。今日、その起源が西のネガティブ押型紋にあるのか、東のポジティブ押型紋にあるのか、決着するまでには到っていないのが現状であろう。

2. **東北の押型紋土器** 日計式押型紋土器は北海道渡島半島から利根川以北に分布し、東北を中心に約150遺跡を数える。東北の日計式押型紋は、主に重層山形紋と重層菱形紋を単位文様し、しばしば菱目紋（斜格子紋）を伴う。また日計式押型紋には特徴的な羽状縄紋（0段多条）などの縄紋土器が相伴する。日計式押型紋の原体は太く（約1cm）長く（約4cm）、

両端は加工しない縦刻原体である。施紋流儀は横方向に密接施紋した後、口縁部と胴部に平行沈線紋で区画する。胎土は繊維を含む。

日計式押型紋土器は三段階(古・中・新)に弁別でき、三戸式沈線紋土器や樋沢・細久保系押型紋土器と対比関係が認められる。三者のあいだには三戸1式との文様構成やモチーフの共通性、日計式と三戸2式・3式との間にキメラ土器、日計式と細久保式2との間にキメラ土器が認められ、その交差関係は次のように検証できる。

日計式系(東北)……………日計(古)式→日計(中)式→日計(新)式→貝殻・沈線紋

沈線紋系(関東)……………三戸1式→三戸2式→三戸3式→田戸下層式

樋沢・細久保式系……………樋沢3式→細久保1式→細久保2式→押型紋終末期

**3. 関東の押型紋土器** 関東の押型紋土器は撚糸紋土器の後半、すなわち稻荷台式以降に共伴する。その出土量も撚糸紋土器が主体で、僅かに押型紋土器が混じる程度である。総じて中部の樋沢・細久保式系押型紋が波及した異系統の在り方を示している。押型紋の施紋方法は撚糸紋の施紋規範に沿って、縦方向に施紋するものが多い。

撚糸紋土器に伴う押型紋土器の時期は樋沢式の段階である。樋沢式は三細分されるが、それに較べて、稻荷台式以降の終末期撚糸紋の型式は多数に細分される。一方の型式が短く、他方の型式が長い訳はないから、撚糸紋土器の細分型式は時間差というよりはその崩壊過程の小地域差を示しているように考えられる。続く沈線紋土器と押型紋土器の対比は、三戸1式-樋沢3式、三戸2式-細久保1式、三戸3式-細久保2式が交差する。三戸1式と樋沢3式の共伴事例、三戸2式と細久保1式の耳状突起の共通性、三戸3式と細久保2式の文様の互換性などから三戸式と樋沢・細久保式系押型紋の対比関係は動かしがたい。その対比関係を整理すると次のようになる。

撚糸紋・沈線紋系……………稻荷台式→終末期→三戸1式→三戸2式→三戸3式

樋沢・細久保式系……………樋沢1式→樋沢2式→樋沢3式→細久保1式→細久保2式

**4. 中部の押型紋土器** 中部の押型紋土器は樋沢・細久保式系と立野式系の二系統の押型紋土器が存在する。この二者は樋沢・細久保式系が在地型式のポジティブ押型紋であり、立野式系が西日本ネガティブ押

型紋の影響を受けた異系統の押型紋である。通説によると立野式が古く、樋沢式が新しいとされるが、両者の時間的關係は型式学的対比によって決めるのが原則であろう。立野式は1式・2式に細分される。立野1式は大川2式に対比され、中部に波及した西日本ネガティブ押型紋土器の地方型式であろう。その時期は樋沢3式段階である。続く立野2式は在地の樋沢・細久保式系との交差によって変容した段階であり、山の神遺跡などの共伴事例から立野2式は細久保1式に対比できよう。こうした交差関係からみると樋沢式は立野式より古い。中部における樋沢・細久保系と立野式系の関係は一系統の変遷ではなく、中部の在地型式(樋沢・細久保式)と異系統型式(立野式)の二系統の関係として理解しなくてはならない。両者の関係は下記のとおりである。

樋沢・細久保式系……………樋沢1式→樋沢2式→樋沢3式→細久保1式→細久保2式

立野式系(異系統)……………立野1式→立野2式

**5. 西日本の前半期押型紋土器** ネガティブ押型紋は大鼻式→大川1式→大川2式→神宮寺式→桐山和田式の五段階に分かれ、この順序で変遷する。大鼻式は西日本最古のネガティブ押型紋である。口縁部の縄紋帯と胴部のネガティブ紋から構成される。施紋流儀は口縁部横方向・胴部縦方向である。大鼻式の出自を撚糸紋土器や表裏縄紋土器を求め、関東編年の井草式段階に対比する見解と稻荷台式以降に対比する二つの考えがある。大川2式が立野1式を介して樋沢3式に併行するならば、関東の三戸1式段階にあたる。この対比関係からみても遡ったとしても稻荷台式以降の所産であろう。

大川式は1式・2式の二段階に分かれる。大川1式はより大鼻式に近く、大川2式はより神宮寺式に近い特徴をもつ。いずれも施紋流儀は口縁部横方向・胴部縦方向を原則とする。大川1式のネガティブ紋と併用する帯状施紋の山形紋は、樋沢・細久保式系とのキメラ関係を示す。山形の条数も多いことから、おそらく樋沢2式段階である。

神宮寺式のネガティブ紋は「舟形沈紋」と呼ばれたように細長く、器壁は薄くつくられる。口縁部はほとんど外反せず、直線的な尖底となる。波状口縁を呈するものもみられる。施紋流儀は口縁部横方向・胴部縦方向である。文様もネガティブ紋のほか、ほかに山形紋のみで構成されるものが伴う。神宮寺式の段階は細

久保1式に対比されよう。続く桐山和田式は神宮寺式の文様を継承しているが、ネガティブ紋の施紋流儀は崩れ、横方向密接施紋が主体となる。この桐山和田式もって、西日本のネガティブ紋の終焉を迎える。近畿の北白川廃寺下層式は西日本まで広範囲に波及した細久保2式の影響と考えられる。

ネガティブ押型紋……大鼻式 → 大川1式 → 大川2式 → 神宮寺式 → 桐山和田式

立野式系押型紋…… 立野1式 → 立野2式  
樋沢・細久保式系…… 樋沢1式 → 樋沢2式 → 樋沢3式 → 細久保1式 → 細久保2式

6. 西日本の後半期押型紋土器 西日本の押型紋土器はネガティブ押型紋が前半期、その後半期が黄島式・高山寺式・穂谷式の段階である。後半期は関東編年からみれば、大まかに田戸下層式以降から田戸上層式に時期にあたる。東日本では東北の日計式や中部の樋沢・細久保式系押型紋がほぼ終焉し、新たな沈線紋土器の時代を迎えている。

西日本では前半期のネガティブ押型紋が終わるのが、ほぼ細久保2式の段階である。細久保2式は関東の田戸下層1式段階と考えられる。この対比が正しければ、後続する黄島式は田戸下層2式・3式に想定することが可能である。しかし物的証拠はなく、この対比関係は更に検証する必要がある。

黄島式は1式・2式の二段階に分かれるが、いずれも口縁部内面に柵状紋+押型紋(山形紋・楕円紋)の施紋規範をもっている。黄島式は瀬戸内の島々に貝塚を形成した時期であり、瀬戸内海の成立を考える上で重要な手がかりを与えてくれる。この内海を通して黄島式は九州にも波及する。続く高山寺式はほぼ田戸上層式に対応するものと考え、この関係も直接的な証拠はない。高山寺式と穂谷式はいずれも1式~3式の三段階に分かれる。高山寺式は口縁部内面に太沈線紋を、穂谷式は押型紋を施紋する。この高山寺式と穂谷式と関係については、九州島の手向山式とも関係し、押型紋土器の終焉の様相は後述する。

押型紋…黄島1式 → 黄島2式 → (+) → 高山寺1式 → 高山寺2式 → 高山寺3式

沈線紋…田戸下層2式 → 田戸下層3式 → 田戸上層1式 → 田戸上層2式 → 田戸上層3式

7. 九州島の押型紋土器 九州島に押型紋土器が出現するのは、いつのことであろうか。賀川光夫をはじめとして九州の多くの研究者は、川原田式→稲荷山式→早水台式→下菅生B式→田村式→ヤトコロ式とす

る「大分編年」を軸に議論されている。

広域編年の定点となる早水台式と下菅生B式は口縁部内面に柵状紋+押型紋を有し、黄島式に対比できる型式である。本州島と九州島をつなぐ広域編年の基準となっている。これに較べて前半期の九州島の押型紋土器は、横方向帯状施紋の川原田式と横方向全面施紋の稲荷山式の僅か二型式である。本州島に比して九州島の押型紋土器の出現は後出的な様相を示している。前半期の押型紋土器が展開しない理由は、南九州で発達した円筒形貝殻土器が九州島全体に及び、独自の円筒形貝殻紋文化を形成していたことと関連する。関東の撚糸紋文化に押型紋土器が波及した現象と同じように、異系統としての押型紋土器が波及したことを物語っている。一方、南九州に押型紋が本格的に波及するのは黄島2式段階の下菅生B式段階であり、やがて独特な手向山式が生まれる。北九州では本州島の高山寺式が波及するとともに、南九州の手向山式押型紋が九州島全体に及び、本州島の穂谷式にも影響を与える。九州島と西日本の対比関係は次のとおりである。

南九州……円筒形貝殻紋後半 → 上野原式 → 出水下層式 → 手向山1式

中九州……別府原式 → 政所式 → 弘法原式 → 中後迫式 → 無田原式 → 瀬田裏式

北九州……川原田式 → 稲荷山式 → 早水台式 → 下菅生B式 → 田村式 → ヤトコロ式

西日本……押型紋前半 → 黄島1式 → 黄島2式 → (+) → 高山寺式

7. 押型紋土器の終焉 列島に拮がった回転施紋の押型紋土器がどのように終焉を迎え、描線手法による新たな土器文化を展開していくのかという問題は、縄紋土器の装飾史あるいは縄紋社会の変遷を考える上でも重要な課題である。

回転施紋の押型紋土器から描線施紋の沈線紋土器への画期は、列島の東と西で異なった推移を示している。東日本で回転施紋からいち早く転換したのは、関東の撚糸紋土器から沈線紋土器への変化であり、それは早期初頭(三戸式)の時期にあたる。東北や中部では前半(田戸下層式)に押型紋土器から沈線紋土器に推移する。この画期が押型紋土器の変遷の前半期と後半期の境となる。一方、西日本ではネガティブ紋の前半期以降もなお押型紋土器が存続し、終焉を迎えるのは東日本の沈線紋土器が終わるほぼ田戸上層式の段階である。それは沈線紋土器から装飾性の乏しい条痕

紋土器への移行期と一致する。

すなわち東日本では押型紋土器前半期が終わり、沈線紋土器に移行する。これに対し西日本では沈線紋土器に推移することなく押型紋土器は存続し、つぎの条痕紋土器への移行期に終焉を迎えるのである。九州島の押型紋土器の終焉は手向山式であり、九州島から本州島に上陸し、関西の穂谷式・中部の相木式に影響を与える。一方、本州島の高山寺式は九州島にも波及し、手向山式と交差する。こうした交差関係は、手向山式は山沿いに広がった「山の文化」、高山寺式は貝塚を形成する「海の文化」として、共存したのであろう。一つの文化の終焉は複雑な様相を呈するのが常である。押型紋土器の終末期の対比関係を下記のように示すが、なお検討すべき問題は多い。

南九州……出水下層式 → 手向山 1 式 → 手向山 2 式 → 手向山 3 式  
北九州……田村式 → ヤトコロ 1 式 → ヤトコロ 2 式 → ヤトコロ 3 式  
西日本…… (+) → 高山寺 1 式 → 高山寺 2 式 → 高山寺 3 式  
東日本……田戸上層 1 式 → 田戸上層 2 式 → 田戸上層 3 式 → 子母口式

8. まとめにかえて 以上のごとく各地域における押型紋土器の対比関係を提示してきたが、北は北海道島渡島半島から南は九州島南端まで、押型紋土器のネットワークは列島の広範囲に広がっている[附表]。また、こうした押型紋土器の斉一性のなかにも各地の地域性が認められ、地域圏と呼ぶべき地域社会が形成されている。押型紋ネットワークは「トロトロ石器」の分布域とも一致する。押型紋土器を表徴する石器として、押型紋人の情報・交易・移動の通行手形ともいべき存在となっている。

土器型式の中には、広範囲に広がりをもつ広域型式と地域圏を表徴する在地型式が存在している。こうした広域型式と在地型式の連鎖的な地域構造が基礎となって、長きにわたる独自の縄紋文化が日本列島に展開するのである。早期の押型紋土器をはじめ、前期の諸磯式・北白川下層式、中期の大木式・加曽利 E 式・船元式、後期の称名寺式・中津式、晩期の亀ヶ岡式など、大別時期の画期や発展を象徴する広域型式として存在している。それに対し在地型式は、広域型式の彩り(地域色)や各時期の崩壊過程に顕在化する傾向にある。こうした縄紋時代の社会変動や画期の基礎的なケース・スタディの 1 つとして、早期押型紋土器の広域編年を考えた次第である。